

ともはつよし社

安江仙弘著

ユダヤの人々

国際秘密力研究叢書第一冊

近代の代表的ユダヤの人々



シオニズムの唱導者
テオドル・ヘルツル博士



シオン團總裁たりし
ワイヅマン博士



露國のユダヤ文豪
アハド・ハム本名ギンツベルグ

ともはつよし社



ユダヤの首府ジェルサレム市ゲッセマイネの園と基督が昔最後の日の前夜弟子ペテロ、ヨハネ等と腰かけたりといふ橄欖の老樹

ユダヤ人々のタイプ



ホーランド・ユダヤ婦人



アメリカ・ユダヤ人



モロッコ・ユダヤ人



ロシア・ユダヤ人



ジェルサレム市の一角に登ゆるダビテの城砦

序

現在の日本は太平洋上の單なる島帝國ではない。天意に依つて既に大陸の一角に其の地歩を占め、大和民族本來の使命に向ひ、邁進しつゝ、あるのである。我等の使命は東洋平和の保障であると共に、皇道に依る世界人類眞の平和の招來である。而して今や世界の情勢は、自ら其の視聽を東洋に集中せしめ、帝國の一舉手一投足は忽ち世界に大波紋を畫きつゝ、ある。更に萬邦は帝國至高の使命を諒解するを得ずして、我を嫉視の渦中に投じて居る、爲に帝國は未曾有の危機に直面し、方に存亡の岐路に立ち、緩急寸分の儉安を許さない。

猶太民族は世界各国に分離散在し、表面は國籍を異にし、國語を異にするも、居常列強を背景として、經濟に外交に並に國際政治に偉大なる勢力を有し、熱烈なる民族愛と、鞏固なる團結力とを以て、國境を超越して隱然たる一種の民族國家を成して居る。

而して又猶太の亡國的特種環境より出でたる特種思想、藝術並に其の文學等は、何れも人類の社會生活に、日々甚大の影響を與へて居る。故に猶太民族の本質、勢力並に其の活動等について之を研究知得することは、列強に率先し以て世界の平和工作に邁進しつゝ、ある大和民族として、眞に喫緊事である。

更に現下國際關係の複雑と其競争の激甚なることは、既に平時に於て思想戰、外交戰、經濟戰、宣傳戰並に資本戰等に歴々として顯はれて居る。今や武力が國防の凡てではなく、又戰鬪は武力のみを以つ終始するものではなくなつた。現在に於て然り、將來に於ては益々然らざるを得ないであらう。此の見えざる戰鬪を唯一の力とし、全世界に亘り大なる役割を演ずるものは、即ち國際的民族たる猶太人である。従つて猶太民族を研究することは、我々日本國民として、國防上よりするも當然爲さねばならぬことである。

著者安江中佐は、予の最も親しき友人である。中佐は猶太民族の世界的役割に着意し、多年猶太民族研究に従事して其の事に精通し、且つ親しく其發祥の地たるパ―レスタイ

ンを始め歐洲各地を巡歴して、各國の猶太民族に接觸し、其交友も亦頗る廣く、猶太研
 究の先覺者として、一大權威たるを失はない。本書に説く所一々實際に徴し、論旨肯綮
 に中り、而も憂國の至情、切々章句の間に溢れ、猶太民族の研究上絶好の資料である。
 予は中佐の達識と憂國の至情に深厚なる敬意を有するものである。猶太問題の研究は獨り
 軍人のみに限らない、有らゆる階級、職業を通じ、等しく之を諒解知得し、以て我が大
 和民族の使命と國家萬年の光明の爲に、十分の關心を茲に傾けることを熱望して已まな
 い。

甲之戌盛夏

南 友 盛

自序

私が茲に在郷軍人會本部の御依頼に依つて、猶太民族に關し、私の研究の一端を説述する機會を與へられたことは、眞に光榮に存ずる次第である。

猶太人に關する問題は、世界の經濟、思想、外交等各種の方面に關係を有し、而も其の範圍は、猶太民族が地球の有らゆる方面に分散して居ると同様、地球全面に亘つてゐる廣汎な問題である。従つて猶太民族に關する總ての方面に立ち入り、深く検討することは、素より此の小冊子の許す所ではない。

併しながら日本人が、尙ほ永く小島國に蟄居してゐるならば格別であるけれども、今や大和民族は、時到つて其の國是たる天業を恢弘すべく、既に大陸に乗り出し、我が日の本の光は皓々として、東洋の一角から世界を照し始めてゐる。我々大和民族は、之から有らゆる障礙を排除し、盤根錯節を超越え、我が國の使命遂行に向つて邁進し、世の有らゆる

邪悪を芟除し、全世界の人類の爲に、皇道に立脚する眞の世界平和を招來せしめねばならぬ。

此の意味に於て、世界の各種方面に隱然たる大勢力を有する、不可思議なる猶太民族に就て、我々が其の實相を捉へておくことは、極めて必要なことであると思ふ。

又猶太人勢力の影響は、單に吾人の對外的の問題ばかりでなく、對內的にも有形無形上大なる關係を持つて居る。従つて我々は、事苟くも猶太勢力の影響ある問題に關しては、猶太民族を認識して、外に處すると同時に、内に顧みる必要があると考へる。

猶太問題は、世界的には最も古い問題であるが、我が國にとつては、極めて新しく、又極めて重要な問題である。從來猶太民族に關する研究は、彼等猶太人が顯然たる國家を有せず、且つ其の活動が直接吾人の耳目に觸れないのと、今一つは彼等が國際的民族なる爲め、其の影響を吾人の日常生活の利害の上に、直接認識し得ない所から、問題の無い所に態々問題を作るが如く考へ、或は全く無關心に之を看過する人々も尠くなかつた。

併しながら過般猶太勢力が、國際聯盟の日支交渉問題に於て顯然として現はれ、又思想經濟問題に於て、彼等の活動が明かに認識されるに及んで、今更の如く、猶太民族の勢力を、人々が感得するやうになつた。

私は今迄隠れたる猶太人の勢力に就て、本書の許す限りに於て、研究の一端を紹介しようと思ふ、それにつき最初に一言して置きたいのは、私は本書を借りて猶太民族を呪詛しようといふのではない、又親猶太主義を鼓吹しようとするのでも無い。私の觀察して居る猶太民族を、ありのまま、讀者の前に展開し、猶太民族に關する認識を、多少なりとも深からしめたいと思ふのである。従つて全く公正なる立場に於て、親疎何れにも與せず、本書に筆を執る次第である。

昭和九年盛夏

著 者 識

増補改訂に際して

ほんしよはつかういらい あいどくしやひ ぞうか
本書発行以來、愛讀者日に増加し、好評嘖々たるは、
ほんしよ たん じだい えうきう てきおう
本書が單に時代の要求に適應し
て居るといふ許りではない。實に廣汎多岐なる猶太民族の真相を、能く此の小冊に簡明
へいい とりまと しか ユダヤもんだい りかい か、は なんびと しゆみおほ どくれう
平易に取纏めてあり、而も猶太問題の理解あるなしに拘らず、何人にも趣味多く讀了し得
るからであらう。

いま せかい きは きふへんでん な ユダヤだいせいりよく きよくとうしんしゆつ ともな わ ていこく と
今や世界は極まりなき急變轉を爲し、猶太大勢力の極東進出に伴ひ、我が帝國に取つ
て猶太問題は益々深刻化して來た。

よつ たうぶ このじやうせい へんくわ かんが とく ちよしや ぞうほ こ すこぶ ちうえう
依て當部は、此情勢の變化に鑑み、特に著者に増補を請ひたるところ、頗る重要なる
すうしやう よ ほんしよ きん おも くは こ、ほんしよ ぞうほ かいいてい せうかい ととも
數章を寄せられ、本書に千鈞の重みを加へられた。茲に本書の増補改訂を紹介すると共に、
ちよしや らう たい しんじん しやい へう しだい
著者の勞に對し深甚なる謝意を表する次第である。

昭和十二年六月

財團 軍人會館事業部長 平田 重三
法人

増補改訂 ユダヤの人々 目次

社団法人 ともはつよし

序 七

自序じじよ 一一

増補改訂に際して 一五

一、相遭遇する猶太と日本の陰陽兩勢力 二七

一、平和戦の雄猶太民族

二、日獨防共協定と猶太民族

三、最近歐米に現れたる猶太人の活動

四、猶太財閥の支那經濟制覇と上海縮甸鐵道の建設

二、國際聯盟は即ち國際猶太人聯盟 四四

一、國際聯盟の起源と猶太人

二、聯盟内の猶太勢力と日支問題

三、日本の聯盟脫退後に於ける猶太の補強工作

三、フリーメーソンと猶太人 六〇

一、フリーメーソンとは何か

二、フリーメーソンの目的

三、フリーメーソンの國々

四、フリーメーソンの習慣と表徴

四、猶太民族の歴史的觀察とシオニズム 七八

一、猶太民族の南下と猶太國建設

二、猶太民族の世界流散

三、猶太人の革命思想

四、ゲツトに於ける猶太人の解放

五、猶太民族の改宗同化主義の瀰漫

六、シオニズムと其の勃興

七、猶太人の民族的自覺

八、猶太民族精神の不變

九、シオン團の編制と行政

五、猶太人口並に其の世界分布 一〇九

一、猶太人の世界人口並に主要諸國及び主要都市に於ける人口に就て

二、パーレスタイン猶太人口

三、猶太人人口協會の調査に依る世界に於ける最近の猶太人人口分布

六、革命と猶太民族 一二八

一、猶太民族は何故革命家なるか

二、マルクスと猶太思想の根底

三、猶太人は資本家か革命家か

四、土耳其革命に於ける猶太人の活動

五、猶太人の露西亞革命への前進

1 露西亞人と猶太人との抗争

2 猶太人の渡米と露西亞革命準備

3 ウイツテ伯の回想録に現はれた亞米利加猶太人

4 猶太巨頭の大統領に對する米露通商條約廢棄の強要

- 5 露西亞大革命の勃發と其の成功
- 6 現ソヴェエト政權と民族争闘
- 六、猶太財閥の發達
- 七、猶太銀行の大同團結
- 八、亞米利加に於ける猶太金權の確立
- 九、猶太財閥の作用
- 一〇、洪牙利革命並に革命の順序
- 一一、英國アイルランドの革命
- 七、獨逸に於ける猶太人 一二二
- 一、世界大戰に於ける獨逸猶太人
- 二、大戰唯一の勝利者と獨逸の管理人
- 三、獨逸革命と猶太人

四、猶太新聞の思想製造

五、戦時需要品の独占、志氣の不振

六、政府の頭上に策動せる猶太人

七、富裕銀行と貧乏猶太人

八、右傾猶太人と左傾猶太人

九、プロレタリアの獨裁

一〇、ナチスの擡頭と猶太人の抗争

八、猶太人の財的勢力と其の影響 二四〇

九、猶太人の言論機關の掌握 二四六

一〇、映畫、ジヤズ等に依る猶太人の宣傳力 二四八

一一、メーデー労働祭の起源は何か 二五二

一二、我が國と猶太民族 二五八

跋 二六九

- 一、近代の代表的ユダヤの人々 三
- 二、基督が最後の日の前夜、弟子と語りしゲツセマイネの園 四
- 三、ユダヤの人々のタイプ 五
- 四、ジェルサレム市の一角に聳ゆるダビテの城砦 六
- 五、フリーメイソンの理想により骨董品となりし王冠 五八
- 六、フリーメイソンの犠牲者フェルヂナンド大公 六七
- 七、猶太の古都ジェルサレム城景 一一〇
- 八、猶太共産村アイン・ハロードの全景 一二三
- 九、民族争闘の悲惨なる光景 一四七
- 一〇、洪牙利共産軍の惨忍極まる活動 二〇七
- 一一、世界文化の中心たらしめんとするヘブライ大學 二三七
- 一二、猶太の泣壁 二六五